

無, Lp (a), Fibrinogen 及び Plasminogen 値, Aspirin 及び warfarin の使用状況. 【結果】LAT は24例 (27%) にみられ, 全てが左心耳血栓であった. 単変量解析では塞栓症の既往 (54% vs 15%,  $p < 0.002$ ), Lp (a) 値 ( $39.0 \pm 28.0$  vs  $18.9 \pm 15.1$  mg/dl,  $p < 0.001$ ), 左房径 ( $5.5 \pm 1.0$  vs  $4.7 \pm 0.6$  cm,  $p < 0.001$ ), SEC (67% vs 38%,  $p < 0.05$ ), warfarin の未使用 (4% vs 32%,  $p < 0.01$ ) が LAT に関係していた. 多変量解析では warfarin の未使用 ( $p < 0.0001$ ), 左房径 ( $p < 0.001$ ), Lp (a) 値 ( $p < 0.01$ ), 塞栓症の既往 ( $p < 0.02$ ) が独立した予測因子であった. 【総括】慢性 AF の LAT の危険因子は従来から言われている warfarin の未使用, 左房径, 塞栓症の既往に加えて, Lp (a) は新しい独立した危険因子である.

女性16例. 診断: 不安定狭心症13例, 急性心筋梗塞20例, 冠動脈病変: 1枝病変15例 (45%), 多枝病変18例 (55%) で内5例 (12%) で左主幹部病変を伴った. 陳旧性心筋梗塞は8例 (24%) に合併が認められた. 【治療】不安定狭心症: PTCA 単独 (POBA) 12例 (92%), 緊急 STENT 1例 (8%). IABP 使用1例 (8%). 急性心筋梗塞: direct PTCA 17例 (85%), PTCA+rescue PTCA 3例 (15%). 【結果および転帰】30例 (91%) は軽快退院し, 入院期間11~67日, 平均30日, 全例当科 (11例) または他院外来 (19例) へ紹介された. 死亡は3例 (9%) で全例来院時 shock 状態であった. 【考案】80歳代では他の年代と異なる適応や, 様々な施行上の注意点 (当日呈示) があるが, 救命および QOL の改善 (発症以前の家庭生活が目標) に有効と考えられた.

5) 多彩な症状を示した感染性心内膜炎 (IE) の1例

小山 仙・河内 文女 (信楽園病院)  
横山 明裕・筒井 牧子 (循環器内科)

(症例) 33歳男性. (主訴) 頭痛, 腹痛. (臨床経過) 1995年12月中旬より40度の発熱が出没した. 翌年2月14日より頭痛を訴え, 近医受診するも軽快せず1996年2月22日当院入院した. 心エコーで僧帽弁前尖の肥厚と僧帽弁逆流3度を認めた. 血液培養にて Strep. viridans が検出され IE を疑い抗生剤治療を開始した. 頭部 MRI では上側頭回に動脈瘤を疑う所見を認めた. 頭痛の緩和時より左側腹部痛を訴え, 3月19日腹部エコーにて脾動脈瘤を認めた. 経過観察にて内部は器質化し血流は消失した. また腹痛も消失した. 4月8日 CRP は陰性化し, 現在再発の兆候はない. IE に伴う脾動脈瘤は比較的稀な症例と考えられ報告した.

2) 高齢者虚血性心疾患に対するカテーテル治療

—初期成績および遠隔期成績—

小田 弘隆・三井田 努  
伊藤 英一・戸枝 哲郎 (新潟市民病院)  
樋熊 紀雄・中川 巖 (循環器科)

【目的】虚血性心疾患を有する75歳以上の高齢者に対するカテーテル冠動脈治療の初期および遠隔期成績を検討した. 【対象および方法】待期的なカテーテル冠動脈治療を行った75歳以上112例, 75歳未満136例を早期成績の対象とした. 遠隔期予後は, 調査可能であった75歳以上97例 (87%), 75歳未満112例 (82%) を対象とした. 初期成功率および遠隔期予後とその関係因子について検討した. 【結果】カテーテル冠動脈治療の患者成功率は75歳未満94%, 75歳以上93%で, 重大合併症は75歳未満で心筋梗塞2例, 75歳以上で死亡1例, 心筋梗塞3例であった. 遠隔期予後の心臓死は75歳未満2%, 75歳以上8%であった ( $p = NS$ ). 再血行再建術は75歳未満27%, 75歳以上25%であった. 75歳以上の生存率解析 (Kaplan-Meier 法) において, 性別, 完全血行再建の有無, 残存する慢性完全閉塞病変の有無では有意差を認めなかったが, 術前有病変枝数で3枝病変は1枝および2枝病変に比し有意に生存率を低下させた. 75歳以上において, 心事故群は生存群に比し, 術前左室駆出率は有意に低値で, 有意に多枝病変であった. 多変量解析 (over all) において心臓死関係因子は完全血行再建の有無, 心事故関係因子は高血圧であり, 高齢は関与していなかった. 【結語】75歳以上に対するカテーテル冠動脈治療の予後を検討した. 1) 患者成功率および合併症頻度は75歳未

II. テーマ演題「高齢者循環器疾患の治療」

1) “80歳代の虚血性心疾患に対する Coronary Intervention”

大塚 英明・吉田 裕志  
本間 元・青木 芳則 (新潟こばり病院)  
宮北 靖・大島 満 (循環器内科)

【対象】1985年9月15日~1996年8月31日当科においてカテーテル治療を行った初回治療時年齢80歳以上の症例33例. 年齢: 80~87歳, 平均83歳. 性別: 男性17例,